



Holy Week

聖なる三日間

主任司祭 マルコ・ターディオフ

2020年4月4日



教会の一年間の典礼暦の中で一番中心になる典礼は、それを通してキリストが私たちの救いを成し遂げて下さった過越の神秘を祝う、聖なる三日間の典礼（聖木曜日・主の晩餐の夕べのミサ、聖金曜日・主の受難の典礼、聖土曜日の夜・復活の聖なる徹夜祭）です。コロナウイルスがもたらした緊急事態を受けてバチカンの典礼秘跡省は、今年に限って聖なる三日間の典礼を会衆の参加なしで行う許可を与えました。ただし、「信者には、各自の住まいで心を合わせて祈ることができるよう、祭儀が始まる時刻を知らせておく」という指示も付け加えています。大船教会では木・金・土とも祭儀は19:00に始まります。しかし、「家で心を合わせて祈りなさい」と言われても、どう祈ればいいのかと戸惑う人もいるのではないかと思います。そのために私は、聖なる三日間の各典礼別に、その典礼の中の一つの聖書の箇所を選んでその箇所に基づいて祈るための資料を準備しました。聖霊の助けを求めてから、その日の聖書の箇所をゆっくり読んで黙想して下さい。その後でその日の資料を読んで祈って下さい。

聖木曜日・主の晩餐の夕べのミサ：1コリント 11章 23～34節

ご存知のように、この日の典礼はご聖体の制定とそれに伴う愛の掟を記念して祝っています。聖木曜日の晩餐のミサから聖土曜日の夜の徹夜祭まで教会はごミサを捧げません。いわゆる「ごミサの断食」によって、教会はキリストが死んで葬られたことを記念して、キリストの十字架のもとと墓の外で静かに過ごして復活を待っています。いつもと違って今年の「ごミサの断食」が四旬節に入って間もなく始まって、しかもご復活祭になっても当分続きそうです。まるで今年の復活節が中止になって、四旬節が未定の日まで続くことになりました。

主のご摂理の中で、主が望みもしない、許しもしない出来事は決して起こりえないから、主からのメッセージがここにもあります。これは「バビロンの捕囚のようなもの」と言う人もいますが、それは適切なイメージだと思います。ユダの民は神殿と全てのいけにえや祭儀が取り上げられて知らない土地に連れて行かれました。でも、その続きも大事です。ユダの民は長く嘆き悲しんでから、やがて自分たちの行動を振り返って主に立ち返り、主の顔を尋ね求めるようになりました。

以上の聖書箇所は晩餐のミサの中で26節まで朗読されますが、今年は主のメッセージはその続きの34節までの部分にあるような気がします。主の体と血をふさわしくないままで飲み食いする者は自分自信に対する裁きを飲み食いしていると、聖パウロは断言します。そしたら個人的にご聖体をふさわしく頂いている人もいるにしても、もしかしたらカトリック教会が全体としてふさわしくごミサを行っていないから、主が教会からごミサを取り上げたかもしれません。いずれにしても、個人としても共同体としてもごミサに対する態度を振り返るいい機会だと思います。

「主よ、私に自分の心を示して下さい。私がどの心でああなたの御体を頂いているかを教えて下さい。そして、私たち大船教会の共同体として、どの心でああなたの御体を頂いているかを教えて下さい。」

聖金曜日・主の受難の典礼：ヘブライ 4 章 14～16 節；5 章 7～9 節

この緊急事態の中でどうなるかという不安を抱いて思い悩む人は少なくないと思います。同じ時期を生きているキリスト者にとっては、以上の聖書箇所が勇気付けるものです。キリストは「私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。」いや、十字架というもっと酷い試練に遭われました。試練に遭ったら、私たちは苦しみますが、キリストは「激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いを捧げ」ました。そして「聞き入れられました」と書いてありますが、実際にはキリストは十字架に付けられて死んでしまいました。やはり「聞き入れられました」という言葉はご復活を指しています。御父はキリストを復活させて死から救って下さいました。だからキリストは「御自分に従順である全ての人々に対して、永遠の救いの源となり」ました。でもキリストは御自分が救われたと全く同じやり方で人々を救って下さいます。すなわち、死を通して死から救って下さいます。人間はどうも苦しみを避けて通って幸せになりたがっていますが、そのような道は人間に与えられていません。人間に与えられたという道はキリストが歩まれた道、すなわち、苦しみを通って幸せになる道です。キリストはその道を開いて下さったから、私たちは「大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」

聖土曜日の夜・復活の聖なる徹夜祭：ローマ 6 章 3～11 節

私たちが救われたのは主の死によってだけでなく、主の復活によっても救われています。でも人間の場合は二段階に分けて救われています。この聖書箇所でも聖パウロは洗礼による第一の復活を説明しています。洗礼の恵みによって私たちは主の死に与りますが、「それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に生きるためなのです。」心の復活、霊的な復活です。「私たちの古い自分がキリストと共に十字架に付けられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないため」です。「死ぬ前に死ぬ。その後は救われようがない」と言われているように、私たちも「自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考え」るべきです。でも、やはり、死は恐ろしいのです。人間はどうしても避けて通りたいと切望します。キリストだったら「激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いを捧げ」ました。しかし、キリストは死を前にして御父に向かって「私の願い通りではなく、御心のままに」と祈られて、弟子たちに「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、私のために命を失う者は、それを得る」と教えられました。（マタイ 26 章 39 節と 16 章 25 節を参照）私たちは、行いによってではなく、全く恵みによって救われています。しかし、主なる神が人間に自由を与えて下さったのは人間が自由に愛するためだと同じように、主が恵みによって救ってくださるのは救われるのを自由に選ぶ人間です。

回心の問題は普通に考えているところにはありません。問題があるのは自分を救われる主の恵みを受け入れるだけの勇気が自分にあるかどうかということなのです。